

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520321

研究課題名（和文） 省略現象の比較統語論的研究

研究課題名（英文） A Comparative Syntactic Study of Ellipsis Phenomena

研究代表者

高橋 大厚（TAKAHASHI DAIKO）

東北大学・大学院国際文化研究科・准教授

研究者番号：00272021

研究成果の概要：

自然言語に観察される省略現象のうち間接疑問縮約と項省略に焦点を当て、文献調査やインフォーマント調査によりそれらを比較統語論的に研究した。間接疑問縮約では、wh 疑問文の形成が英語とは異なる日本語を中心に考察し、先行詞との対比を伴う間接疑問縮約構文が今後の研究に重要であるとの結論を得た。項省略では、自由語順現象との相関を複数の言語を比較することによって検証し、その相関は部分的であるという結果を得た。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
年度			
総計	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：統語論、比較統語論、省略現象、空主語・目的語、間接疑問縮約

1. 研究開始当初の背景

省略現象は近年変形生成統語論において最も活発に研究されている課題の一つである。過去においては英語における省略現象の研究が主流であったが、最近では英語以外の言語の省略現象を考察し、普遍文法理論の精緻化が図られている。間接疑問縮約については、先行研究により様々な言語におけるその特徴が明らかにされつつあるが、日本語のような顕在的な疑問詞移動のない言語における当該構文の派生や構造がどうなっ

ているのかは意見の一致を見ていない。また項省略は、日本語のような言語における空目的語構文に対する動詞句省略分析の代案として提案されたもので、その二つの対案の比較検討は依然として重要な研究課題であり、また実際に項省略が存在するならば、それを可能にするパラメーターの同定も重要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、複数の言語における省略現象を精査し、その類似点・相違点を明らかにし、それらの背後にある普遍文法の原理・パラメーターを追求することによって普遍文法理論の精緻化を目指すことである。

3. 研究の方法

(1) 間接疑問省略について・・・日本語の当該現象についての文献調査・データの発掘・先行分析の比較検討を行なう。それを受け、日本語の当該現象の最も妥当と思われる分析を提示し、他の言語の類似現象との比較を通してそれがどの程度通言語的に通用するか検証する。主に文献を基にした研究になるが必要に応じて母語話者への調査も加える。

(2) 項省略について・・・研究代表者の論文で展開されている議論を、新しいデータの発掘や関連文献の調査などによりさらに拡張させる。項省略と自由語順現象の関係について、空主語・空目的語を許す、日本語と類似した言語（中国語、バスク語など）の関連データを文献や母語話者への調査を通して精査し、検討する。

4. 研究成果

以下、間接疑問縮約と項省略の各々について記述する。

(1) 間接疑問縮約について

① 主な成果

日本語の当該現象については近年分裂文構造から導く分析（以下、分裂文分析と呼ぶ）が主流である（Nishiyama, Whitman, and Yi (1996), Kuwabara (1996), Saito (2004) など）。これは以下に例示される。

- (i) 太郎が誰かを批判したが、(私は) [誰をか] 覚えていない。
- (ii) 太郎が誰かを批判したが、(私は) [[太郎が批判したのが] 誰をであるか] 覚えていない。

分裂文分析は、概略(i)を(ii)から前提節の省略と繫辞の任意性により派生する立場である。この分析によれば、(iii)の例文が示

すように、(i)において任意に繫辞が出現できるという事実も捉えられる。

- (iii) 太郎が誰かを批判したが、(私は) [誰をであるか] 覚えていない。

しかしながら、分裂文分析では説明が難しい事実が存在する。まず、Merchant (2001) は英語に関して次のような例文を考察している。

- (iv) John criticized Mary, but I don't remember who else.

ここでは後続文に間接疑問縮約が生じているが、残余 *wh* 句に *else* という修飾語が付いている。Merchant (2001) は (iv) の文脈では次例のように分裂文を用いることができないと述べている。

- (v) John criticized Mary, but * I don't remember who else it was that John criticized.

この分裂文の特徴を念頭に、以下の日本語の例文を考察する((vi)のような例文はFukaya (2007)の主要考察事例の一つであるが、筆者の見限りFukaya (2007)は分裂文分析との関連でこのような事例を扱っていない)。

- (vi) 太郎は花子を批判したが、(私は) [他の誰をか] 覚えていない。
- (vii) 太郎は花子を批判したが、* (私は) [[太郎が批判したのが] 他の誰をか] 覚えていない。

例文(vii)のような文脈で、分裂文を用いることは不自然である。これは上記(v)の例文が示すものと同様の効果であると考えられる。(vi)の間接疑問縮約文を派生するのに(vii)のような分裂文構造を想定する立場は、(vi)は(vii)と同様に非文となることを予測するが、(vi)は適格である。つまり、(vi)のような例文は分裂文分析で扱うことが難しいのである。

さらに、日本語の分裂文の特徴として、焦点位置に格表示された名詞句が現れにくいことが従来観察されている(Hoji (1989) など)。次例は焦点に主格名詞句が現れ容認度が落ちている。

- (viii) * オールスターゲームでランニングホームランを打ったのはイチローがだ。

これを念頭に以下の例文を考察する。

- (ix) 誰かがオールスターゲームでランニングホームランを打ったが、(私は)[どの選手がか]思い出せない。
- (x) 誰かがオールスターゲームでランニングホームランを打ったが、?* (私は)[[オールスターゲームでランニングホームランを打ったのが]どの選手がか]思い出せない。

(x)は(viii)と同様容認度が低いが、(ix)の間接疑問縮約文は適格である。この(x)と(x)の差異は、分裂文分析では捉えるのが困難な事実である。

上記、二つの考察は本研究の結果得られた成果であり、日本語の間接疑問縮約には分裂文分析では扱えない事例が存在することを示す。ここで留意すべきは、(vi)や(ix)における繫辞の出現の可能性である。次例は当該の二例に繫辞が生じたものである。

- (xi) 太郎は花子を批判したが、*(私は)[他の誰をであるか]覚えていない。
- (xii) 誰かがオールスターゲームでランニングホームランを打ったが、(私は)[どの選手がだったか]思い出せない。

(xi)は容認度が低く、(vi)のような環境において繫辞が出現できないことを示している。一方、(xii)は比較的容認度が高く、(ix)の文脈においては分裂文構造が想定されないにもかかわらず、繫辞が現れうることを示す。分裂文構造や繫辞構造に関わらない、英語に見られる「純粹」な関節疑問縮約を日本語で考察するには、(vi)のようなデータが重要であることになる。

② 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

上記(vi)は純粹な間接疑問縮約の例であると述べたが、そうするとそれがどのような派生を経て生成されるか解明されなければならない。日本語のような顕在的な疑問詞移動が存在しないと言われる言語において間接疑問縮約をどのように扱うかはTakahashi (1994)で提起された研究課題であるが、(vi)はそれが未だに課題であることを示す。

また、上記(xii)の例文は、分裂文構造を持たないにもかかわらず繫辞が出現する例であった。繫辞の出現については東アジアの言語間に興味深い差異が見られる。韓国語では間接疑問縮約において繫辞は義務的に現れなければならない(Nishiyama, Whitman, and Yi (1996))。他方、中国語では、繫辞の出現が残余 *wh* 句の種類によって変わる(Wang (2002))。具体的には、残余句が項の場合は

繫辞は義務的であり、付加詞の場合は任意である。少なくとも日本語においては分裂文構造を想定せずに、東アジア三言語間の繫辞の出現に関する差異をどのように説明するかはマイクロパラメーター研究における重要な問題である。

③ 今後の展望

上記①で得られた成果が即ち喫緊の研究課題である。比較統語論的な観点からそれらを解明することが期待される。顕在的な疑問詞移動がないにもかかわらず間接疑問縮約を許す言語においては焦点移動の関与が文献で示唆されている(van Craenenbroeck and Lipták (2008), Fukaya (2007), Wang (2002)など)。今後はこの可能性を検証することが重要である。また、東アジア三言語において間接疑問縮約に生じる繫辞を詳細に分析することも重要であり、これにより当該三言語間のマイクロパラメーターの発見が期待される。

(2) 項省略について

① 主な成果

Oku (1998)によって提案された項省略がかき混ぜ(自由語順現象)と相関するという仮説を、日本語と同様に空主語・空目的語を許す言語を考察し検証した。対象とした言語は、韓国語、モンゴル語、中国語、バスク語の四言語で、このうち前者二言語はかき混ぜを有する言語で、後者二言語はかき混ぜのない言語である。文献調査(Otani and Whitman (1991)など)や母語話者に対する調査の結果、韓国語とモンゴル語は、日本語と同様に主語と目的語の省略を許すこと、他方中国語とバスク語は目的語の省略は許すが主語の省略は許さないことがわかった。

項省略がかき混ぜと相関するという仮説のもとでは、かき混ぜを有する韓国語とモンゴル語は日本語と同様に振る舞うことが予想され、これは調査結果と合致する。他方、かき混ぜのない中国語とバスク語では、項省略が許されないことが予想される。当該二言語が主語の省略を許さないことはこれに合致するが、目的語の省略を許すことは合致しない。このことは、項省略とかき混ぜの相関が部分的であることを示唆する。中国語とバスク語の目的語省略が真に項省略によるものなのか、それとも他の文法操作(例えば動詞句省略)によるものなのか解明することが次の課題である。

② 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

空主語・空目的語現象は生成統語論において長年研究されてきたが、それを空代名詞ではなく省略という視点から比較統語論的に考察する本研究は数少ないものであると言える。特に、省略という観点から日本語を空主語・空目的語現象が観察されるその他の複数の言語と比較する研究は斬新なものである。ここで得られた、あるいは今後継続して行われる研究で得られる成果は、項省略を可能にするパラメーターの解明につながると考えられる。

③ 今後の展望

上記①で述べたように、中国語とバスク語の目的語の省略が何に起因するものかを解明することが喫緊の課題である。それにより、項省略とかき混ぜの相関の妥当性を決めることが可能となる。また、同時に考察対象の言語を増やしていくことも重要である。トルコ語やセルビア・クロアチア語のように、日本語にはない一致現象を有する言語の考察が有用である。

参考文献

- van Craenenbroeck, J. and A. Lipták (2008) "On the Interaction between Verb Movement and Ellipsis: New Evidence from Hungarian." *Proceedings of the 26th West Coast Conference on Formal Linguistics*: 138-146.
- Fukaya, T. (2007) *Sluicing and Stripping in Japanese and Some Implications*. Ph.D. dissertation. University of Southern California.
- Hoji, H. (1989) "Theories of Anaphora and Aspects of Japanese Syntax." Ms., University of Southern California.
- Kuwabara, K. (1996) "Multiple Wh-Phrases in Elliptical Clauses and Some Aspects of Clefts with Multiple Foci." *Formal Approaches to Japanese Linguistics 2: MIT Working Papers in Linguistics* 29: 97-116.
- Merchant, J. (2001) *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*. Oxford University Press.
- Nishiyama, K., J. Whitman, and E. Yi (1996) "Syntactic Movement of Overt Wh-phrases in Japanese and Korean." *Japanese/Korean Linguistics* 5: 337-351.
- Oku, S. (1998) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist*

Program. Ph.D. dissertation. University of Connecticut.

- Otani, K. and J. Whitman (1991) "V-Raising and VP-Ellipsis." *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.
- Saito, M. (2004) "Ellipsis and Pronominal Reference in Japanese Clefts." *Nanzan Linguistics* 1: 21-50.
- Takahashi, D. (1994) "Sluicing in Japanese." *Journal of East Asian Linguistics* 3: 263-300.
- Wang, C. A. (2002) *On Sluicing in Mandarin Chinese*. MA thesis. National Tsing Hua University.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Takahashi, Daiko (2008) "Quantificational Null Objects and Argument Ellipsis." *Linguistic Inquiry* 39: 307-326. 査読有.

[学会発表] (計 3 件)

- ① Takahashi, Daiko. "Comparative Syntax of Argument Ellipsis." 南山比較統語論国際共同研究プロジェクト：第3回ワークショップ. 南山大学. 2009年3月12日.
- ② Takahashi, Daiko. "How to Find Antecedents for Argument Ellipsis." The 3rd Syntax Workshop. 南山大学. 2008年8月3日.
- ③ Takahashi, Daiko. "Argument Ellipsis from a Cross-linguistic Perspective: An Interim Report." GLOW in Asia VI. 香港中文大学. 2007年12月27-29日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者
高橋 大厚 (TAKAHASHI DAIKO)
東北大学・大学院国際文化研究科・准教授
研究者番号：00272021

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者